平成13年３月13日第三種郵便物許可　2012年１月25日発行　年４回（１、４、７、10月の25日発行）

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959

Vol.21 / No.4

The Baseball Hall of Fame and Museum
財団法人 野球体育博物館

平成24年　野球殿堂入り記者発表

事務局長　廣瀬　信一

１月13日㈮午後３時より野球体育博物館の殿堂ホールにおいて、平成24年の「野球殿堂入り」記者発表が行われました。今回は競技者表彰委員会・プレーヤー表彰で広島東洋カープの黄金期を支えた、北別府 学さんと故・津田 恒実さんが、特別表彰委員会からはプロアマの垣根を越え、五輪の日本代表編成に尽力された元全日本アマチュア野球連盟会長の故・長船 騏郎さんと金属バットの安全基準と木製バットの原材料であるアオダモの育成に取り組み、球界の発展に貢献された元芝浦工業大学学長の故・大本 修さんが殿堂入りされました。尚、競技者表彰委員会のエキスパート表彰は該当者がいませんでした。加藤 良三理事長の挨拶に続き、永瀬 郷太郎代表幹事より競技者表彰委員会、また西田 善夫特別表彰委員会議長より特別表彰委員会の選考過程について各々報告がありました。

顕彰者の挨拶では、北別府さんは亡き後輩・津田さんとの同時受賞の喜びを「生きていたら、きっと一緒に祝杯を上げていた」としみじみと語られました。津田氏夫人の晃代（てるよ）さんは、「受賞の知らせを受け、一番驚いているのは津田本人ではないかと思います。当時のチームメイトに支えられ、代表して頂いた賞だと思います」と涙を流しながら謝辞を述べられました。長船氏夫人の宏子さんも涙ながらに感謝の言葉を述べられ、大本氏夫人の昭子（あきこ）さんは「主人にとっては喜び多い仕事でした。それを認めて頂き、心からお礼申し上げます」と感慨深げに挨拶されました。

続くゲストスピーチでは、北別府さん、津田さんの現役時に監督を務め、現在は東京国際大野球部監督である古葉 竹識さんから「二人を選んでいただき本当に有り難うございます。選手達に恵まれ、いつも感謝して監督をしています。（北別府さんの沢村賞や津田さんの新人王など）全てのタイトルを監督時代に経験することができました」と笑顔で話されました。山本 浩二さんは、後輩のダブル栄誉に喜びながらも津田さんの話に及ぶと、何度も言葉を詰まらせ、「カープが最後に優勝したのは1991年。津田が入院した年なんです。誰もが津田を思い、ポケットにお守りを忍ばせながらプレーした。だから、優勝できたのは津田のおかげなんです…」と天国の津田さんに感謝の言葉を贈られました。

特別表彰のお二方のゲストスピーチは、日本学生野球協会の内藤 雅之事務局長より、岡山県出身の二人が同時受賞されたことを喜び、「長船さんは学生野球とプロ野球が、協力しあうようになる道筋をつけてくれた」、大本さんについては工学博士という本業の傍ら「アオダモ資源育成の会」理事長を務められたことなどを話されました。

最後に、殿堂入りの方々とご家族、ゲストスピーカーのみなさまなどを交えた写真撮影を行いました。新聞社・テレビ局などの報道陣100名余りのご出席により熱気あふれる雰囲気のなか、記者発表は無事終了しました。

後列左から　湊谷 武雄氏、山本 浩二氏、津田 大毅氏、古葉 竹識氏、長船 至氏、内藤 雅之氏
前列左から　北別府 学氏、津田 晃代氏、加藤理事長、長船 宏子氏、大本 昭子氏

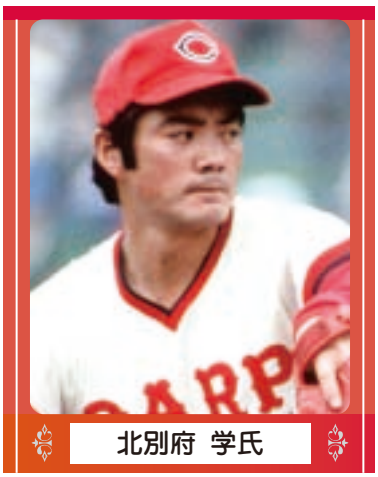
競技者表彰委員会

第52回競技者表彰委員会はプレーヤー表彰で、抜群の制球力を生かして通算213勝を挙げた北別府 学氏と速球勝負に徹した故･津田 恒実氏の２人を野球殿堂入りに選出した。野球取材に関して15年以上の経験を持つ委員331名のうち314名が７名連記で投票。北別府氏は257票、津田氏は237票で当選必要数の236票を上回った。

両氏はともに広島東洋カープ出身。82年から91年まで10年間にわたって同じマウンドに立った。同時期に同じ球団でプレーした複数の選手が同じ年に殿堂入りするのは９組目。カープOBでは初で、ともに投手は61年に大毎でプレーし85年に殿堂入りした杉下 茂、荒巻 淳両氏以来２組目となる。

エキスパート表彰は競技者表彰が２部門に分かれた初年度の2008年以来４年ぶりに当選者が出なかった。すでに殿堂入りしている方と競技者表彰委員会幹事47名のうち38名が３名連記で投票。最多得票は外木場 義郎さんの28票で、当選必要数の29票にわずか１票届かなかった。

外木場氏もカープOB。惜しくも史上初となる同一球団OB３人同時殿堂入りはならなかったが、開票２日後というタイトな日程ながら記者発表の席にはゲストスピーカーとして元監督の古葉 竹識（現東京国際大野球部監督）、山本 浩二両氏が駆けつけてくれ、さながらカープOB会の趣があった。



北別府 学氏

「久しぶりに完封してヒーローになったような気分です」と喜びを語った北別府氏が宮崎の都城農高からカープにドラフト１位指名されたのは、古葉新監督の下で赤ヘル旋風を巻き起こし、球団創設初優勝を飾った75年だった。

１年目の76年は２勝１敗に終わり、古葉氏の「新人王を獲ってくれ」という期待には応えられなかったが、６年後にそれを実現したのが山口の南陽工高から協和発酵を経て81年ドラフト１位で入団した津田氏だ。82年に先発で11勝６敗をマークし、球団史上初の新人王に輝いた。

その後、北別府氏は針の穴を通すようなコントロールでエースに成長。津田氏は右手中指の血行障害に苦しみながら抑えに転向して86年の優勝に貢献し、カムバック賞を受賞した。優勝を決めた10月12日のヤクルト戦（神宮）は北別府 ― 津田のリレーだった。

津田 恒実氏

この優勝を花道に現役を引退した山本氏は89年に監督就任。津田氏が体の異変を訴えたのが３年目の91年４月だった。悪性の脳腫瘍…。山本氏は「ツネのためにも頑張ろうじゃないか」と選手の尻を叩くと同時に、占い師や祈祷師などあらゆる手段に頼って回復を願った。全員帽子にお札を入れて試合に臨んだこともある。この年の優勝を「ツネに対する思いがチームをひとつにしてくれた」と声を詰まらせながら振り返った。

93年７月20日､32歳の若さで帰らぬ人となった津田氏。記憶に残る「炎のストッパー」は資格最終年に野球殿堂入りを果たした。その栄誉は永遠に刻まれる。熊本から駆けつけた妻の晃代（てるよ）さんは「一番驚いているのは津田本人だと思います。北別府さんと一緒に選ばれて、本人は感慨深く受け止めていると思います」と目を潤ませた。

東京国際大で古葉氏から指導を受けた一人息子の大毅さんも姿を見せ、父の殿堂入りの通知書を手に父の背番号14の雄姿、北別府氏とともに記念の写真に収まった。両サイドには古葉、山本両氏。涙が乾いた目に喜びが溢れる。古き良き時代、強き赤ヘル軍団の姿がそこにあった。

（競技者表彰委員会代表幹事　永瀬 郷太郎）

写真提供：ベースボール･マガジン社（北別府氏・津田氏）

特別表彰委員会

特別表彰委員会の選考は、

①プロ・アマチュアを問わず野球の組織や管理に関わった人、つまり球団代表から裏方までの総てです。

②アマチュア野球を引退した人。

③各界から野球界を支えた人……と野球に関わる全ての人が対象になります。

野球殿堂入りが注目されるにつれて多くの方が推薦されます。最近は選手の母校、特に大学を挙げての推薦が目立ちます。

昨年11月の候補者選考委員会で10人以内の最終候補者を決定しました。

今回は新たに、記録の権威・宇佐美 徹也、野球博士と親しまれた元東京大学監督の神田 順治、バルセロナ・オリンピック銅メダル監督の山中 正竹の三氏が候補者に加わりました。

選考委員14名の内、元東京大学監督の渡辺 融（とおる）氏が引退され、大学野球と甲子園の高校野球審判を長年務めた清水 幹裕（つねひろ）氏が加わりました。

選考委員会は１月10日に加藤 良三野球体育博物館理事長の挨拶で始まりました。特別表彰委員会は昨年、推薦者ゼロに終わり各委員共空しい思いをしました。今年の委員会は「殿堂入りに相応しい人がいなかったのではない。お互いが理解する討論が足りなかった」という発言もあり、議長の呼びかけより先に発言の挙手があるほど積極的でした。発言者を指名する必要もないほど意見が続出しました。気が付いたら会議開始から１時間を経過していました。

投票総数14票、３名連記で殿堂入りに必要な投票数75%、11票です。

投票結果は

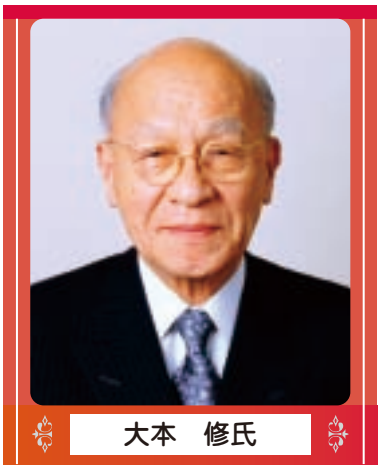
①長船 騏郎氏	12票	
②大本　修氏	12票	
次点　福嶋 一雄氏	８票	（以下省略）

長船 騏郎氏

こうして長船 騏郎氏と大本 修氏の殿堂入りが決まりました。

☆長船 騏郎氏は天理中学から早稲田大学に進み、学徒出陣の一員となりました。

やがて大学野球、アマチュア野球の事務方を務め、大学野球選手権、明治神宮野球大会、日米大学野球の開催を手がけました。その後、国際的なプロ・アマチュアの融和に呼応して国内の垣根を越えてアテネ・オリンピックでは日本代表チーム監督に長嶋 茂雄氏を召請しました。病魔の為に長嶋監督は実現しませんでしたが「長嶋ジャパン」は今日の日本スポーツのプロ・アマ一体化の原点となりました。長船氏は選考委員の一人として特別表彰委員を務め、2007（平成19）年に83歳で逝去されました。



大本　修氏

☆大本 修氏は芝浦工業大学の学長も務めた電気工学の専門家で大変な野球愛好家でした。1974（昭和49）年高校野球に金属バットが導入されると安全基準の設定に尽力されました。一方、野球のバッティングは本来「木のバット」を理想としてバットの素材「アオダモ資源育成の会」を設立され、苗木の植樹を実践しながら、野球の将来へ大きなロマンを持っておられました。2008（平成20）年に83歳で逝去されました。工学博士の野球殿堂入りは1991（平成３）年の中澤 良夫氏（第２代・高野連会長）以来21年ぶりで殿堂表彰者の基盤の広がりを感じます。

特別委員会の表彰は、先達を対象とするため故人に贈られる傾向にあります。

表彰式で長船、大本両夫人とも「一番驚いているのは当人と思います」と挨拶されました。殿堂入りの喜びは、やはりご当人に伝えたい……。この５年間ご存命中に表彰された方は居られません。特別表彰委員会の対策こそ急務と心得ます。

（特別表彰委員　西田 善夫）

殿堂入りの人々を語る (34)

2002年野球殿堂入り
山内 一弘氏レリーフ

父の思い出、エピソード

山内　麻椰（山内 一弘氏 長女）

生前、父のあだ名は「かっぱえびせん」でした。教えだしたらやめられない、止まらないから付いた名前です。亡くなるまで野球が大好きで、特に教える事は大好きで、出し惜しみする事なくプロ・アマ問わず誰にでも、時間を忘れて教えていました。その事は私達娘の遊びに於いても例外ではありませんでした。妹はスポーツ好きで、小学３年の時に遊びのつもりで、お友達と野球をやりたいと父に話しました。我が家は娘ばかりで男の子はいませんから父はとても嬉しかったと思います。早速グローブを買い、キャッチボールを教える事になりました。妹もお友達もキャッチボールと言うよりボール投げという感じでルールもあまり知らず、楽しく遊ぶつもりでいました。しかし父はボールの持ち方・手首の使い方・腰の使い方…と少年野球チームの子供達や本格的に野球をやっている子供達に教えるように、技術的な事を１から細かく教え始めました。基礎を熱くしっかりと教え始めましたから８、９才の妹達には全然楽しくなかったようです。暗くなってきたから帰ろうと妹が言っても「まだだ！もう少し」と勢いは納まらず、お友達が帰った後もまさに特訓状態だったようです。帰宅した妹は「もうイヤだ、ちっともおもしろくない」「難しくてわからない」となげいていました。一方の父はとても楽しそうな満足げな表情で、この対照的な様子がおもしろかったのを覚えています。父は遊びで野球をという妹の話を忘れ、熱心に教え出して止まらなかったのでした。レッスンは２回くらいやりましたが、やはり続く事はありませんでした。

年月が経ち父が阪神のコーチをしている頃、私の娘（父にとっては孫）が小学３年の時のことです。甲子園で試合前にファンの人のスピードガンコンテストがあるから出るか？と父に聞かれ、娘は二つ返事でやりたいと、出る事にしました。夏休みにでる事にして、娘にもグローブを買い、１ヶ月くらい前から父の特訓が始まりました。その頃父の拠点は関西でしたから、試合で帰京した短い期間にボールの投げ方を熱心に教えていました。妹より孫の方が野球が好きで活発でしたので教えがいもあったようです。孫ですからことさら嬉しかったようで、特訓は教え出したらなかなか止まりませんでした。そしてスピードガンコンテスト当日、父は既に球場のベンチに座っていて、よほど嬉しかったようで周りの監督さんや選手の方々に、孫が投げるんだ、女の子だが自分が投げ方を教えたと、皆さんに話していたそうです。その時の様子を父は嬉しそうに私達家族に聞かせてくれました。今思い出しても、父は本当に嬉しそうで何よりのお爺ちゃん孝行になったと思います。

それからも、娘は父の良きキャッチボール相手となり、父がワールド・ベースボール・クラシックの外国チームの始球式に出ると決まった時も、その練習の相手をしてくれました。体調があまり良くなかった父でしたが、グラウンドに降りた途端に身体がシャキッとして見違えるほどだったのをよく覚えています。亡くなる直前まで野球を教えに行きたいと言い、夢の中でも教えているように寝言まで言っていた父でした。子供のように純粋に野球を愛し、多くの方々に支えて頂いて亡くなるまで大好きな野球に携われた父は、本当に幸せだったと思います。

コラム／博覧・博楽 (41)

プロ野球人としての父・赤嶺 昌志

外山　弥生（赤嶺 昌志氏 長女）

私の父、赤嶺 昌志が日本職業野球連盟の名古屋軍に入ったのは、まだ太平洋戦争が始まらない時でした。“プロ野球”ではなくて“職業野球”、しかも名古屋“軍”というところに、時代を感じます。父は早速、チーム強化に力を注ぎ、自分の出身地、九州を中心に、有望な選手をスカウトしました。小鶴誠、金山 次郎、石丸 藤吉、三村 勲、大澤 清たちが集まりました。“遠征”と称されていた地方での試合には同行し、合宿での麻雀を禁じたりしたそうです。

そのうちに戦争が始まりました。“ストライク”“ボール”の審判用語が“よし”“だめ”と替ったりしましたが、戦況が厳しくなって、野球どころではなくなり、父はチームを預かって、選手たちと一緒に理研株式会社に引き取ってもらいました。昼休みに各課の課長が歌を歌って、会社中にスピーカーで流すことになりました。前の晩に、“愛国行進曲”を歌うから教えてくれと父は私に頼んだのですが、父は大音痴ですから、何回教えてもどうにもなりません。次の日、父の歌が会社中に流れた時、「オレはあんまり恥ずかしいから、テーブルの下にもぐりこんだよ」と、ひょうきんな金山さんはその後も繰り返して私たちを笑わせました。父と選手たちは肉親同様に親しくなり、父は“じいさん”と呼ばれ、彼らにお子さんが生まれると、頼まれて名前を考えたりしていました。

やがて終戦となり、プロ野球も再開です。もう“職業野球”ではなく“プロフェッショナル・ベースボール”、略して“プロ野球”です。広島に新しいチームを作ることになりました。“フランチャイズ”という考えがアメリカから入ってきたのです。広島から父に相談があったようです。ドラゴンズも愛知県色の強いチームにしたかったのでしょう。地元出身でない父たちは居心地が悪くなり、選手たちは広島の新チームへ移ることになりました。これが“赤嶺旋風”と野球雑誌などで書き立てられる騒ぎとなりました。「弱すぎるチームがあってはいけない。今にわかってもらえる」と父は淋しそうでした。そして蔭から、広島のチーム強化に協力していました。「チーム名を元気のよい“鯉”にしたいそうだ。“鯉”の英語を調べてほしい」と父に頼まれて英語の教師だった私は、「“鯉”は英語では“Carp”。魚の名は複数形にもＳをつけないのよ」と答えました。

また、広島県出身、アメリカのフレスノ市在住の銭村氏の令息ケンゾウ、ケンシ兄弟が優秀な選手で、かれらを“カープ”に招聘したいというので、何度も英文の手紙を書いて実現させたのも私でした。彼らが来日の時には、父と非公式に出迎えに行きました。

父はこうして戦前、戦中、戦後と日本のプロ野球の発展のために働きましたが、その中で最大の仕事と私がひそかに誇りに思っているのは、日本プロ野球協約を作成したことと、野球体育博物館の設立に携わったことです。

日本プロ野球協約を作るには、まずアメリカの協約を翻訳しなければなりません。郡司 利男氏という、非常に優れた英語力の持ち主で、当時は東京文理科大学の大学院生、後に筑波大学教授になった方に翻訳をお願いしました。訳文の第一稿が出来上がると、父は郡司氏と曜日を決めて、逐一、訳文を検討しました。父はこの仕事に全力投球したせいか、次の仕事である、野球体育博物館設立に取りかかった頃には、ほとんど視力を失っていました。

野球体育博物館は、アメリカの“野球の殿堂”を手本にしました。廣瀬 謙三氏に初代主事を引き受けていただくのには時間がかかりましたが、ようやく承諾を得て、いよいよ開館の準備が整いました。昭和34（1959）年の野球体育博物館の開館を見届けた後、父は昭和38（1963）年に66歳で他界しました。

父の没後50年、奇しくもプロ野球人としての父について、一文を書くようにとのおすすめを頂きました。誠にありがたく、厚く御礼申し上げます。

知ってほしいこんな資料（77）

斉藤　三郎氏寄贈の少年世界競争双六

双六は、サイコロを振って出た目の数だけ紙に描かれたマスを進み、早く「上り」に達するのを競うもので、はねつきやカルタと共にお正月の子供たちの定番の遊びでした。杉浦 非水：画、厳谷　小波：案のこの双六は、博文館発行の雑誌『少年世界』大正８（1919）年１月号の附録でした。それぞれのコマにさまざまな競争（スポーツだけではなく凧揚なども）が描かれ、野球は10コマ目にあります。また、中央の「上り」にも野球姿の少年が優勝旗を持って立っていて、当時の少年たちにとって野球の人気の高さを反映しているようです。

これは、斉藤　三郎氏から寄贈されたものです。新国劇で『早慶戦時代』の台本を書かれたり、石川　啄木の研究をされた方ですが、野球史研究家としても多くの仕事をされています。特に『日本野球文献解題』（1939年）は、野球史を調査する人にとっては非常にありがたいものです。また、「日本野球の伝来は明治５年」というのは、斉藤氏がはじめて唱えた説といわれています。昭和34（1959）年の開館時には当館の嘱託として仕事をされていましたが、翌年２月に急逝されました。『野球展覧会誌』（「こんにちは図書室です」をご参照下さい）に出ている斉藤氏出品資料の多くが当館に来ています。さらに、整理されていない状態のスクラップ帳なども当館で保存しています。今後は、こういった資料をPDFなどのデータにして野球史の調査に生かすとともに、斉藤氏の業績をもっと明らかにしていきたいと考えています。

学芸員　新　美和子

こんにちは図書室です

「創始百年記念　野球展覧会誌」と「創始百年記念　野球展目録」

今から73年前の1939（昭和14）年に大阪・阪急百貨店で創始百年記念野球展覧会が行われました。この展覧会は当時野球の起源とされていたアブナー・ダブルディが野球を作ったとされる1839年から百年たった事を記念し、大阪だけではなく、福井県のだるま屋でも行われました。

阪急百貨店で行われた展覧会の写真や出品目録が1940（昭和15）年12月に「創始百年記念　野球展覧会誌」として、だるま屋で行われたものは1939年10月に「創始百年記念　野球展目録」として本になっており、当館の図書室で所蔵しています。

展覧会誌を見ると、野球の歴史はもちろん大学野球、中等学校野球（現在の高校野球）、職業野球（現在のプロ野球）、さらにアメリカの野球についても展示されていました。またボールやバットの製作実演も行われていたようで、野球全般をカバーした大規模な野球展であったことがうかがえます。

展覧会誌には出品者ごとの資料目録がついていて、河野　安通志氏（1960年殿堂入り）や市岡　忠男氏（1962年殿堂入り）などが出品しています。知ってほしいこんな資料で紹介した、双六を寄贈していただいた斉藤　三郎氏は阪急百貨店での展覧会に55種類60点の資料を出品しています。出品した資料の内51点は本で、この中には日本初の洋式スポーツ書といわれる『Outdoor Games』やベースボールを野球と訳した中馬　庚（1970年殿堂入り）が著した『増補　野球』などがあります。図書室にも斉藤氏が所蔵していた資料が多く寄贈されており、明治・大正期の野球を知る上で貴重な資料となっています。

司書　茅根　拓

野球体育博物館 トピックス（2011年11月～2012年１月編）

【10月27日】松永氏、五明氏、山本氏が来館！

松永 怜一氏（2007年殿堂入り）、五明 公男氏（法政大学スポーツ健康学部教授）と共に、山本浩二氏（2008年殿堂入り）が来館しました。

左より五明氏、松永氏、山本氏

【11月５日】韓国プロ野球コミッショナーが来館！

韓国野球委員会（KBO）の具本綾コミッショナーが来館し、常設展示、殿堂ホール、図書室などをご覧になりました。

中央が具コミッショナー
（その右隣が廣瀬館長）

【11月22日】ジャイアンツ新入団選手が来館！

野球体育博物館に読売ジャイアンツの新入団選手が来館しました！
松本 竜也投手（英明高）ら選手たちは、当館外にある戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」や、館内の野球殿堂、プロ野球の歴史を紹介する展示などを見学しました。

読売ジャイアンツ新入団選手

【11月４日～】東北第一代表の「青獅子旗」 展示

展示中の「青獅子旗」

青獅子旗は、都市対抗２次予選地区大会で優勝し、全国大会出場を決めたチームに与えられる優勝旗。東北大会の青獅子旗は、2010年優勝の日本製紙石巻（宮城県石巻市）の応接室に飾られていましたが、2011年３月11日の震災による津波で建物ごと流されてしまいました。しかし、７月に敷地内のがれき撤去作業中に奇跡的に発見されました。色あせて破れてはいますが、何十年も受け継がれた東北第一代表の「青獅子旗」は、復興の象徴として第82回都市対抗野球大会の開催期間中（2011年10月22日～11月１日）京セラドームで展示されました。この「青獅子旗」は野球体育博物館に到着し、11 月４日より野球殿堂ホールで展示中です。

【2012年１月12日】上田氏来館！

上田 利治氏（2003年殿堂入り）が来館、応接室にて佐々木 信也氏との対談が行われました。この模様は、2月1日発売のベースボール・マガジン社刊「日本プロ野球、昭和の名将」にて紹介されます。

上田氏（右）と佐々木氏

博物館からのお知らせ

▶理事・評議員

〔就任〕
- 評議員　林 信平（のぶひら）氏（千葉ロッテマリーンズ執行役員運営本部長）
- 評議員　山岸 均氏（読売巨人軍取締役連盟担当）

〔退任〕
- 評議員　石川 晃氏
- 評議員　原沢 敦氏

▶販売中！

《NPB統一球オーセンティックボール》

（シリアルナンバー入りNPB承認シール付き）2,500円（税込）

※郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金（公認球代+梱包送料）を現金書留で当博物館までご送付下さい。
公 認 球：１個 2,500円
梱包送料：１個 250円、２～３個 400円、４個以上 送料無料
送付先：〒112-0004　東京都文京区後楽1－3－61
財団法人野球体育博物館 公認球係

▶予告

今年３月に『野球殿堂2012』を発行いたします。
前回の『野球殿堂1959－2009』に2010年、11年、12年の野球殿堂入りの方々の略歴を加え、また新しく野球の歴史年表を追加した最新版です。
詳しくは次号のニュースレターでお知らせいたします。

● 博物館のご案内

場　　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　３月１日～９月30日　AM10時～PM６時
　　10月１日～２月末日　AM10時～PM５時
　　（入館は閉館の30分前まで）
入 館 料　大　　人　500円（300円）｝（　　）は
　　小・中学生　200円（150円）｝20名以上の団体
　　65 歳 以 上　300円
休 館 日　月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
　　年末・年始（12月29日～１月１日）

《２月・３月・４月の休館日》
２月　６日・13日・20日・27日
３月　５日・12日・19日
４月　９日・16日・23日

春休み期間の３月20日～４月８日は無休です。

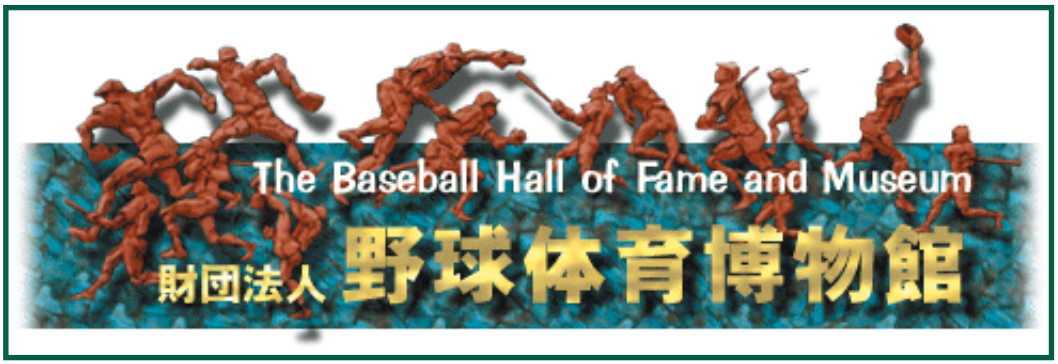
▶訂正

前号（Vol.21, No.3）で次の訂正があります。
５ページ 下から６行目　「OPEC」→「OPAC」
（注・「OPAC」は図書館の蔵書検索システムの事）
謹んでお詫びし、訂正いたします。

●編集後記　1月13日に行われた野球殿堂入り記者発表には、多くの取材陣がいらっしゃいました。会場の殿堂ホールは、祝福ムードにあふれていました。その様子を夕方からの各局のスポーツニュースや翌日の新聞で、ご覧になった方も多かったのではないでしょうか。

Newsletter Vol.21 / No.4
2012年１月25日発行
編集・発行　財団法人　野球体育博物館
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel　03（3811）3600　Fax　03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/
定　価　100円

平成13年３月13日第三種郵便物許可　2012年１月25日発行　年４回（１、４、７、10月の25日発行）
Newsletter
Vol.21 / No.4



リレー随筆(47)

出会いに感謝、一期一会一球

競技者表彰委員　　宮田　匡二（デイリースポーツ）

昨年暮れ、大阪・梅田の料理屋で忘年会をやった。その夜は在籍した出身高校の野球部の同期に先輩後輩合わせて20人ほどが集まり、昔話に花を咲かせた。

宴会が終わりに近づいたころ、尾藤さんの話になった。箕島高校の監督をされていた尾藤公（ただし）さんだ。我々を指導してくれた当時の監督が、35年も前のオーダーをスラスラと諳（そら）んじ、むらっ気の多いチームを苦笑いで振り返る中、箕島高校との練習試合の話題にチラリと触れた。

「尾藤さんには本当に感謝してるんや。大阪の、こんな無名の公立高校との練習試合を快く受けてくださったんやから。縁もゆかりもない学校相手に、しかもダブルヘッダーを。感謝してもしたりんよ」

私立の強豪になど相手にされないほど存在感に乏しかったチーム。それでも全国レベルの高校に一度でいいから胸を借りたい。その一心で和歌山まで行ったという。海べりにある学校を訪問した際、校内に尾藤さんの姿はなく、有田川に隔てられた川向こうにいると聞いた。ほっそりとした野球部員が居場所を教えてくれた。翌年のセンバツ大会で優勝投手となった東 裕司さんだった。

川を渡り、ダメもとで練習試合の件を切り出すと、初対面だというのに、「ああ、いいですよ」との思いがけない言葉が笑顔と一緒に返ってきた。うれしいと感じる前にビックリしたという。

昭和51（1976）年４月。ダブルヘッダーの第１試合は23－１で負けた。やはり完敗。力の差は想像以上だった。２試合目は２回途中、二塁走者の私が東さんの牽制球を右こめかみに受けて退場。試合は中止になった。コーチの人に背負われ、意識もうろうの状態だった。ただ、尾藤さんの「ボールがよう弾んだから大丈夫や」という声だけがはっきりと耳に残った。

その後、縁あって高校野球評論―聞き手の立場で「わが麗しの甲子園」という新聞コラムの執筆にかかわる機会に恵まれた。尾藤さんは、いくら弱くても全力を出し切るチームには拍手を送ったが、基本を怠るプレーには厳しかった。

甲子園球場の記者席からグラウンドを見つめる尾藤さんに、ある時、こんなふうに聞いてみた。もの凄く弱い大阪の学校が箕島に乗り込んだが、辻本、東両投手をまったく打てず、何本もホームランを打たれ、挙げ句の果てにケガ人が出て中止。その病院送りとなったのが、目の前にいる私です―と。すると尾藤さんは笑いながらこう言った。「ああ、そうでしたか。そんなことがありましたかねえ」。さすがに覚えていらっしゃらなかった。

あれほどに強い箕島が、見るからに弱そうな我々を直立不動で迎え入れ、深々と頭を下げて挨拶する。どれだけ点を取っても手を抜こうとしない。強いチームほど『こうあらねばならない』ことを教えてくれているようだった。三振した箕島の選手がベンチの上に正座させられていた。試合中に目にする初めての光景に背筋が凍った。だが、これもまた指導のうちだと思った。当時はまだ「尾藤スマイル」などない時代だった。

「来る者は拒まず」。それが尾藤流だと聞いた。同じ普通の公立高校。根底にそんな謙虚な姿勢があったように思う。６年後、母校は夏の甲子園大会に出場した。奇跡が起きたと言われた。

アマチュア球界の発展に力を尽くした尾藤さん。野球の底辺にいるだけで終わった私のような者でさえ、無形の力を与えてもらったと思っている。数え切れない人たちが、同じ思いを抱いているに違いない。

座右の銘を著書のタイトルにした「一期一会一球」。会社の机の上でブックエンドに挟まれ、直立不動でこちらを見ている。早いもので、尾藤さんが亡くなられて、もうすぐ一年になる。